

# 浦城方言の程度表現形式

蔣 垂 東

## 0. はじめに

浦城県は、北部と東北部は浙江省の龍泉、遂昌、江山3県に隣接し、西北部は江西省の広豊県とつながっている福建省最北端に位置する県である<sup>(1)</sup>。北部・東北部・西北部が呉語地域、南部・西南部・東南部は福建省内の閩語地域に囲まれている同県では数種類もの方言が話され、福建省で方言使用状況が最も複雑な県の一つとして知られている<sup>(2)</sup>。全県17の郷と鎮の内、県城南浦鎮をはじめとする北部12の郷と鎮で話されている方言は一般に浦城話と呼ばれ、本稿でいう浦城方言とは、この方言のことを指す。浦城方言は、方言区分上呉語の処衢方言に分類されているが<sup>(3)</sup>、その帰属についての判断を保留する研究もあるなど<sup>(4)</sup>、実態が明らかにされていない点が少なくない。本稿は、形容詞の程度表現に焦点を当てて、他の処衢方言との異同に言及しつつ、浦城方言の程度表現について考察するものである<sup>(5)</sup>。

---

(1) 西南部は福建省の武夷山市(旧崇安県)、南部は同建陽市、東南部は同松溪県と接する。

(2) 『続修浦城県志』巻六「言語附」に「浦城土音與正音相近、雖婦孺亦多能操正音、実勝於他邑。至邑中土音不特、與他邑不同、且城與郷異、此郷與彼郷亦異、約計閩邑語言不下十余種、実全閩所罕觀」(pp.106-107)とあり、李如龍(1991:p392,1994:p1223)によると、この状況は現在もほぼそのまま維持されているという。

(3) この説を支持する研究は、鄭張尚芳(1985)、『中国語言地圖集』(1988)、李如龍(1991,1994)、曹志耘他(2000)、曹志耘(2008)などがある。

(4) Jerry Norman(1988:pp.213-214)など。

(5) 本稿で取り扱う浦城方言のデータは全て著者自身の内省に基づいているが、正確を期するため、浦城県城出身の蔣穎賢(当時80歳)、繆翠英(同77歳)らに確認した。

## 1. 吳語処衢方言

### 1.1 処衢方言について

処衢方言とは、『中国語言地図集』(1988)の「吳語処衢片」の方言を指し、その分布地域は浙江省南西部を中心に、江西省東部と福建省北部の一部に及んでいる。具体的な分布地域は下記の通り。

浙江省 金華市所属の武義県  
衢州市所属の柯城区、衢県、龍遊県、開化県、常県、  
江山県  
麗水地区所属の麗水市、遂昌県、松陽県、縉県雲、  
青田県、雲和県、景寧族自治県、  
龍泉県、慶元県  
温州市所属の泰順県  
江西省 上饒地区所属の上饒市、上饒県、広豊県、玉山県  
福建省 南平地区所属の浦城県(一部)

内、衢州は彼の有名な趙元任(1928)『現代吳語的研究』で調査地点の一つとして取り上げられていたことは周知の通りである。近年、処衢方言に関しては、曹志耘・秋谷裕幸・太田斎・趙日新(2000)『吳語処衢方言研究』(以下では、曹志耘他(2000)と略する)、曹志耘(2002)『南部吳語語音研究』、秋谷裕幸(2003)『吳語処衢方言(西北片)古音構擬』など注目すべき研究成果が相次いで発表されている。その中で、開化、常山、玉山、龍遊、遂昌、雲和、慶元という7つの代表地点の音韻、語彙、文法を詳細に記述・比較した曹志耘他(2000)によって、同方言の全体像が明らかにされつつある。曹志耘他(2000)によると、処衢方言には、中古音の従母等破擦音系子音が摩擦音系邪母へ合流<sup>(6)</sup>、宕摂開口一等唐鐸韻と三等陽葉韻が主母音の違いを維持(龍遊を除く)<sup>(7)</sup>、梗摂開口二等陰声類と曾摂開口一等韻が合流せず(開化、広豊、慶元を除く)<sup>(8)</sup>など、吳語の典型的な音韻的特徴が認められる一方、軽唇音の一部

(6) 例えば、常山：坐  $zi^4$  | 蚕  $zu\tilde{\alpha}^2$  (p28)

(7) 例えば、遂昌：缸  $k\alpha\eta^1$  | 姜三登  $t\alpha\eta^1$  (p31)

(8) 例えば、遂昌：争耕  $t\alpha\eta^1$  ≠ 曾姓。登  $t\alpha^1$  (p31)

と舌上音の一部がそれぞれ重唇音、舌頭音と区別がなく<sup>(9)</sup>、梗摂開口三四等の「柄病暝」の韻母が梗摂二等に同じ<sup>(10)</sup>、通摂三等屋韻と燭韻が一部を除き対立を維持する(広豊、龍遊を除く)<sup>(11)</sup>など、呉語の他の地域にはあまり見られないが、閩語の特徴に一致する興味深い現象が存在している。こうした現象は同方言と閩語との関係を強く意識させるものである。

## 1.2 処衢方言の程度表現形式

曹志耘他(2000:pp. 421-422, 454-455, 461)によると、処衢方言の程度表現には以下三つの形式が見られる。

- (1) 形容詞の程度を表すのに、形容詞の前に普通話の“很”に相当する「好好熱=開化)、交関(交関香=遂昌)、悪作(悪作熱=常山)、不得了(不得了熱=常山)、真(真暖=龍遊)、猛(猛暖=龍遊)、蛮(蛮香=慶元)、十分、特別、吓、太、忒(忒咸=7地点全部)」などの程度副詞をつける
- (2) 遂昌、雲和、縉雲などでは、一部の形容詞と動詞の後に“猛”又は“頭(險とも書く)”をつけて、“A猛”(猛暖=龍遊)、“A頭”(厚頭=雲和)の形式で程度が高いことを表し、さらに“A猛A”(暖猛暖=龍遊)、“A頭A”(厚頭厚=雲和)の形式で程度が最高であることを表す用法がある。また、常山では“A得頭”(香得頭)、玉山では“A得很”(熱得很)の形式がある
- (3) 普通話と同様、「鮮紅」「筆直」「鉄硬」「噴香」など“bA”の形式で形容詞の程度を表す用法がある

## 2. 浦城方言の程度副詞

浦城方言では、形容詞の前に用いられる程度副詞として「很、好、蛮、非常、十分、实在、确实、特別、太、最、稀、無世」などがあり、その内の「很、好、非常、十分、实在、确实、特別、太、比較、最」などは普通話に一致するものである。1.2で取り上げた他の処衢方言の程度副詞「交関、悪作、不得了、猛、

(9) 例えば、江山：腹 po<sup>27</sup> | 紡 phon<sup>3</sup> | 縛 bia<sup>27</sup> (p28)

遂昌：猪 ta<sup>1</sup> | 拆縫児 t<sup>h</sup>ia<sup>27</sup> | 腸 dā<sup>2</sup> (p29)

(10) 例えば、江山：柄 pā<sup>3</sup> | 病 bā<sup>6</sup> | 暝 mā<sup>6</sup> (pp.31 ~ 32)

(11) 例えば、慶元：粥 tciu<sup>27</sup> ≠ 燭 tciu<sup>27</sup> (p32)

吓、忒」は浦城方言において使用例の存在が確認されておらず、浦城方言の「稀」と「無世」は普通話にも処衢方言にもあまり見られないものとして注目される。次の2.1と2.2でこれらの用法について検討してみたい。

## 2.1 「稀」

浦城方言では、「稀[hɿ陰平]」は、普通話の「很、非常」に相当する使用頻度が高い程度副詞である。呉語の一部の地域に散発的な用例は見られるものの<sup>(12)</sup>、程度副詞として高い使用頻度で用いられるのは浦城方言の特徴の一つであると言える。それには以下のような用法が見られる(小文字は普通話、以下同じ)。

(1)一音節の形容詞の前にしか用いられない。

言える

例：稀酸、稀爛、稀皺皺巴巴  
稀窄、稀辣、稀粗很粗糙、很粗

言えない

稀難過、稀熱鬧、稀舒服  
稀辛苦、稀小氣、稀緊張

(2)高一低、長一短、厚一薄、新一旧、香一臭など対立する意味をもつ形容詞を中心に、程度が低い若しくは意味が好ましくない方の形容詞の前に多く用いられる。

言える

例：稀矮、稀苦、稀臭、稀咸  
稀旧、稀薄、稀湿、稀清很稀

言えない

稀高、稀甜、稀香、稀淡  
稀新、稀厚、稀燥、稀濃很稠

上記の他、「稀」と共起できる形容詞は以下のようなものがある。

---

(12) 例えば、温州方言には「稀很瘦」「稀很薄」(『温州方言辞典』p12)、金華方言には「稀很破」「稀很擘・透湿」「稀很臭」「稀透湿」(『金華方言辞典』pp.13-14) 慶之方言には「稀呱爛」「稀呼爛」(呉式求2010:p139) などとある

稀渾很渾濁、稀糊粘糊糊、稀鈍不鋒利、稀空空撈撈、稀花很模糊、  
 稀乱乱糟糟、稀臊很腥、稀松不緊、稀□lue<sup>陽上</sup>很短、稀粘很粘、  
 稀乾乾巴巴、稀□hian<sup>陰平</sup>油發臭、稀歪歪歪扭扭、稀破破破爛爛、  
 稀癩很癩、稀餓餓得厲害、稀飢很餓

(3)一部に「稀」を重ねて「稀稀A」の形式で強調を表す用法がある。

例：稀稀矮、稀稀破、稀稀臭、稀稀咸、稀稀爛、稀稀花  
 稀稀苦、稀稀酸、稀稀湿、稀稀辣、稀稀臊、稀稀粗

(4)「稀巴A」の形で強調を表す用法もある。

例：稀巴苦、稀巴咸、稀巴酸、稀巴臊、稀巴矮、稀巴皺  
 稀巴臭、稀巴粘、稀巴爛、稀巴旧、稀巴湿、稀巴乱

## 2.2 「無世」

「無世[muo<sup>陽平</sup> sie<sup>陰去</sup>」は、普通話の「極其」「～極了」に相当、程度が最高であることを表し、二音節の形容詞にも使える。後述するように程度の補語として用いることもできるが、程度副詞として形容詞の前に用いる場合は普通話の「那」に相当する「□[huo<sup>陰去</sup>」を添えて、「無世□～」の形式をとることが多い。

例：無世□壞極其壞      無世□苦極其苦      無世□貴極其貴  
 無世□高興極其高興      無世□好啞極其好啞      無世□難過極其難過

## 3. 浦城方言の程度補語

曹志耘他(2000)によって明らかにされたように、形容詞や動詞の後ろに用いられる程度表現の形式として処衢方言の多くの地点には“A猛”“A顯”(一部は“A得顯”)や“A猛A”“A顯A”があり<sup>(13)</sup>、南部吳語の特徴であるとし

(13) 顔逸明(2000:pp.137-138)によると、浙南甌語にも“A顯A”の形式がある。

て知られている。しかし、浦城方言ではこれらの形式が用いられていない。  
浦城方言では、程度補語は主として以下の形式が用いられている。

A 得緊～得很  
A 得有有点兒～  
A (解) 米子～一点点兒  
A (解) 米米子～一点点兒  
A (解) 多～一些  
A (解) 多子～一点点兒  
A (解) 多多子～一点点兒  
A 得多～得多  
A 死了～死了  
A 得不得了～不得了  
A 到家～到家了  
A 都A 到家～都～到家了  
A 無世了～極了  
A 都A 無世了～都～極了

上記の内、「A 得多」「A 死了」「A 得不得了」「A 到家」「A 都A 到家」は普通話に一致するもので、「A 得緊」「A 得有」「A (解) 米子」「A (解) 米米子」「A (解) 多」「A (解) 多子」「A (解) 多多子」「A 無世了」「A 都A 無世了」などは普通話や他の処衢方言に見られない形式である。

### 3.1 「A 得緊」

「A 得緊 [le?入 kin<sup>陰上</sup>]」は普通話の「～得很」に相当、浦城方言では最もよく用いられる程度表現形式の一つである<sup>(14)</sup>。

例：壞得緊 壞得很	矮得緊 矮得很	香得緊 香得很
辛苦得緊 辛苦得很	緊張得緊 緊張得很	熱鬧得緊 熱鬧得很

(14) 南方官話を反映する江戸時代の唐話資料や清代の成立と考えられる琉球官話課本には「A 得緊」の用例が多数存在する。

### 3.2 「A得有」「A(解)米子」「A(解)多」

「A得有[le?入 iu陽上]」「A(解)米子[miŋ陽上 tsi陰上]」「A(解)多[la陰平]」はともに「少し」、「僅かに」と程度が低いことを表す。「A(解)多」は「A(解)多子」の「子」を省略した形と見ることができ、「A(解)米米子」と「A(解)多多子」はそれぞれ「A(解)米子」と「A(解)多子」の強調形である。なお、「解ka陽平」は普通話の「一」に相当するもので、省略可能である。

例：好得有好一些

好(解)米子好一点点兒／好(解)多好一点点兒

好(解)米米子好一点点兒／好(解)多多子好一点点兒

便宜得有便宜一些

便宜(解)米子便宜一点点兒／便宜(解)多便宜一点点兒

便宜(解)米米子便宜一点点兒／便宜(解)多多子便宜一点点兒

### 3.3 「A無世了」

2.2で述べたように、程度が最高であることを表す「無世」は副詞として形容詞の前に用いることができることに加え、程度補語として形容詞の後ろに用いることもできる。程度補語として形容詞の後ろに用いる場合は、「了[lo]」を添えて、「A無世了」の形をとることが多く、普通話の「～極了」に相当する。強調する場合、「A都[luo陰平]A無世了」の形式にすることができる。

例：烏無世了黒極了

— 烏都烏無世了

香無世了香極了

— 香都香無世了

高興無世了高興極了

— 高興都高興無世了

熱鬧無世了熱鬧極了

— 熱鬧都熱鬧無世了

## 4. 浦城方言形容詞のbA形式

1.2で述べたように、他の処衢方言では普通話と同様、「鮮紅」「筆直」「鉄硬」「噴香」など、形容詞の前に付加成分をつけて“bA”の形式で形容詞の程度を表す用法があるということも、曹志耘他(2000)によって明らかにされている。浦城方言の形容詞に関して言えば、bA形式が存在するだけでなく、下

記の例が示すように種類が多彩である。これもまた浦城方言の特徴の一つであると言えよう(下線は同音字を示す)。

例：緋紅鮮紅、訓綠碧綠、血藍湛藍、松黃黃澄澄、嶄青鉄青、蔬白雪白、  
 駿烏黑乎乎、暗乎乎、朗光亮堂堂、緋燒熱乎乎、冰冷冷冰冰、噴香香噴噴、  
 □te陽平重沉掂掂、飄輕輕飄飄、鉄硬硬邦邦、癩軟軟綿綿、鉢滿很滿、  
刮壯很肥胖、瑟瘦很瘦、滿長很長、米□lue陽上很短、鼓緊緊綳綳、  
刮濃很濃、實清很清徹、鉄實很結實、体泡很飽滿、□s'ia陽上癩很癩、  
滢酥很松脆、渣潤很潮、□tse陰平老很硬・很老、注嫩很嫩、絶早老早、  
 焦燥很乾、渣透透濕、血平很平坦、体平很平坦、標直筆直、歟滑很滑、  
 □te陽平大碩大、米小細小、米大一丁点兒大、刮飽很飽、滾圓圓滾滾、  
歟光很光亮・精光、渣洩很洩、□tsuoʔ入靜寂靜、筆尖很尖、絶細很細、  
 □te陽平厚很厚、体薄很薄、筆豎陡階、蜜甜很甜、血亮鏗亮・雪亮、  
遮淡味很淡、滢松很松散、皇新嶄新、嶄新嶄新、飛快飛快・很鋒利

朱徳熙(1956:pp.2-3)は、普通話のbA形式形容詞の特徴として以下の2点を挙げている。

(1)重ね形式はbAbAである。 例えば、「通紅 → 通紅通紅」など。

(2)前項要素bが後項要素となり、Abbの形式に変わることがある。

例えば、「冰涼 → 涼冰冰」など。

浦城方言のbA形式の形容詞には、(1)のbAbA重ね形式はなく、従って「冰涼冰涼」「鉄硬鉄硬」のような言い方はできない。(2)のAbb形式はあるが、下記のように多くの場合、bを変えなければならない点で特徴と言えよう。また、普通話にない前項要素を重ねたbbA形式もある。

bA	bbA	Abb
例：滾圓	滾滾圓	圓滾滾
飄輕	飄飄輕	輕飄飄
□te陽平厚	—	厚□te陽平□te陽平
米小	米米小	—
駿烏	駿駿烏	烏兮兮

緋紅	緋緋紅	紅兮兮
松黃	松松黃	黃澄澄
鰍滑	鰍鰍滑	滑溜溜
鰍光	鰍鰍光	光溜溜
癩軟	癩癩軟	軟疲疲
渣湿	—	湿溶溶
休薄	—	薄□nje陽上□nje陽上

bbA形式は普通話にない形式として注目されるが、同じ形式は、呉語をはじめ、近隣の閩語と客家語にも見られ<sup>(15)</sup>、AbbとbbA両方の形式をもつのは南方系漢語方言の多くに見られる共通点である。

なお、浦城方言では、bA形式の形容詞の一部には、bとAの間に他の要素を入れて、bxAという拡張形式で強調を表すこともできる。

例：鰍光	→	鰍溜光		
遮淡	→	遮巴淡		
黠烏	→	黠摸烏	→	黠摸鬼烏
刮壯	→	刮邇壯	→	刮邇邇壯
鉄硬	→	鉄巴硬	→	鉄巴角落硬

拡張形式のxには、「黠摸鬼烏」のように「摸鬼」という意味的な拡張による強調と「鉄巴硬」などに見られる「巴」のようなオノマトペ的な拡張による強調が混在し、複雑な様相を見せている。なお、bxA形式は、近隣の閩語にはないものの、呉語の温州方言にも「雪能白」などの例の存在が報告されている<sup>(16)</sup>。

(15) 呉語では、蘇州方言に「生生青」、上海方言に「雪雪白」、杭州方言に「墨墨黒」（顔逸明1994:p225）、紹興方言に「血血紅」（劉勳寧氏の教示による）、温州方言に「暖昏昏」（鄭張尚芳2003:p314）、閩語では、福州方言には「当当新」（陳沢平1998:p121）、廈門方言に「罕罕烏」（周長楫 歐陽億1998:p274）、客家語では、長汀方言に「華華光」（藍小玲1999:p251）、などとある。

(16) 鄭張尚芳(2003: pp.314-315)

## 5. おわりに

以上、程度副詞、程度補語、形容詞のbA形式という三つの側面からの考察によって浦城方言程度表現について下記のことが明らかになったと言えよう。

- (1)浦城方言には、「稀A」「無世□A」「A得有」「A(解)米子」「A(解)米米子」「A無世了」「A都A無世了」など他の処衢方言にあまり見られない程度副詞と程度補語の形式が存在している。これらの形式は浦城方言ではいづれも高い使用頻度を有している。
- (2)他の処衢方言で用いられる程度副詞「交閃、悪作、不得了、猛、吓、忒」および“A猛”“A顕”(一部は“A得顕”)や“A猛A”“A顕A”などの程度表現形式は浦城方言においては確認されていない。
- (3)浦城方言の程度副詞や程度補語には普通話(官話)に一致するものも多く、普通話(官話)の要素が色濃く反映されている。
- (4)bA形式の形容詞については、浦城方言はbAbA形式がないものの、Abb形式の他に、bbA形式とbxA形式も有している。bbAもbxAも有するのは呉語に多く見られる特徴だが、bbAの形式は近隣の閩語と客家語においても確認されている。

### 主な参考文献

- 秋谷裕幸(2003)『呉語処衢方言(西北片)古音構擬』好文出版
- 袁家驊等(1989)『漢語方言概要(第二版)』文字改革出版社
- 翁天祐修、翁昭泰纂(1900)『統修浦城縣志』台湾成文出版社1967年影印本
- 顏逸明(1994)『呉語概説』華東師範大学出版社
- 〃(2000)『浙南甌語』華東師範大学出版社
- 許宝華(2002)「呉語」(『現代漢語方言概論』所収)上海教育出版社
- 項夢水(1997)『連城客家話語法研究』語文出版社
- 呉式求(2010)『慶元方言研究』浙江大学出版社
- 呉連正 駱偉里 王均熙 黃希堅 胡慧斌(1995)『吳方言辭典』漢語大詞典出版社
- 周長楫 歐陽億(1998)『廈門方言研究』福建人民出版社
- 朱德熙(1956)「現代漢語形容詞研究」(『語言研究』1956年第1期、商務印書館1999年版『朱德熙文集』第2卷所収)
- 蔣垂東、蔣或婷(2003)「福建浦城方言の基礎語彙その一」(『言語と文化』第16号)
- 〃(2004)「福建浦城方言の基礎語彙その二」(『言語と文化』第17号)
- 曹志耘(1996)『金華方言詞典』江蘇教育出版社
- 〃(2002)『南部吳語語音研究』商務印書館

- 〃 (2008)『漢語方言地圖集』商務印書館
- 曹志耘 秋谷裕幸 大田齋 趙日新(2000)『吳語處衢方言研究』好文出版
- 趙元任(1928)『現代吳語的研究』(清華學校研究院叢書第四種)、  
科学出版社1956年版
- 陳 沢平(1998)『福州方言研究』福建人民出版社
- 鄭張尚芳(1985)「浦城方言的南北区分」(『方言』1985年第一期)
- 〃 (2003)「温州方言構詞法的表情修辭變式」(『吳語研究 一第二屆國際吳方言學  
術研討會論文集』所収)上海教育出版社
- 樋口 靖(1992)「福建浦城方言の概略」(『筑波中国文化論叢』11)
- 游汝傑、楊乾明(1998)『温州方言詞典』江蘇教育出版社
- 藍 小玲(1999)『閩西客家方言』廈門大學出版社
- 李 如龍(1991)「浦城県内の方言」(『閩語研究』所収)語文出版社
- 〃 (1994)『浦城県志(卷三十八 方言)』中華書局
- Norman, Jerry 1988. *Chinese*, Cambridge University Press.

<付記>本稿は中国文化学会平成15年度大会にて行った研究発表をもとに考察を加えた  
ものです。稿をなすにあつては発表当時および各機会を通じて多くの方々よりご意見、  
ご教示を賜りました。記して厚く感謝の意を表します。

(文教大学)